

<全体分析>

試験時間 120分

解答形式 論述形式 分量・難易(前年比較) 分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化) 分量は大問3題「400字×3題」で例年通り。難易度はやや易化した。 出題の特徴 Iは、2019・2021年度は古代～近世のテーマ史の出題であったが、本年度は2022年度と同様に近世を中心とした出題であった。2022年度はII・IIIともに近代から出題され、現代は出題されなかったが、本年度はIIIが現代からの出題であった。2022年度はI・II・IIIのすべてが史料を利用した出題であり、本年度のIが史料を利用した出題であった。また、I・II・IIIのすべてで、定着している単答問題が出題された。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	経世論と江戸時代の政治・社会 《史料》	問1「海保青陵」を確定する要素が少なく、難。問2は史料の内容をふまえて解答したいが、設問の要求を満たしてまとめるのが難しかったであろう。問3・4・5は平易な内容なので、これらを取りこぼさないようにしたい。2016年度に「公事方御定書」が、2019年度に「村田清風」が出題されている。	やや難
II	論述	政府とマスメディアとの関係	問1・2・3はやや平易な内容なので、ここで得点を確保したい。問4は、2022年度の「ファシズムの台頭」、2019年度の「学問・思想弾圧」などと同様に一橋大学頻出の昭和戦前期からの出題であるが、詳細な知識が問われており難しい。	標準
III	論述	戦中・戦後の沖縄と外交・社会	2022年が沖縄返還50周年にあたったため、要注意テーマの一つであり、ある程度対策はとれていただろう。問1は易。問4は一橋大学志望者ならば正解したい。問2はやや詳細な知識が必要でありやや難。問3は平易な内容である。問5はやや難。一橋大学は近世・近代・現代ともに社会経済史は頻出であるので、少しでも加点につながる解答をまとめたい。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

一橋大学の日本史は難度が高く、教科書を中心とする表面的な知識だけでは高得点は難しい。しかし、出題されるテーマは毎年ほぼ一定の範囲内に限定されているので、過去問の研究は不可欠である。前近代では、テーマ設定が社会経済史に加え、法制史を中心とする政治史や、外交史・文化史の出題もみられる。また、近現代では、明治・大正期における寄生地主制や資本主義の発達、15年戦争～戦後期の政治・外交・経済などを軸に、社会史に関する問題も増えている。そこで、これらを中心に、頻出テーマに対する理解を深めておくとうまいだろう。
